

春日部福音自由教会 2020年12月20日11:00中央会堂礼拝(同時配信)

聖書 新約聖書 ヨハネの福音書 1章1節～5節

説教 「いのちの光」高橋敏夫名誉牧師

I. 闇が支配する世界

2020年、主イエス・キリストのご降誕祭の礼拝おめでとうございます。

今朝の拝読された聖書の箇所は、ヨハネの福音書1章の1節から5節でございます。「いのちの光」という説教題をつけていますが、副題としては「2020年 私の降誕祭を想う」という副題を自分なりにつけております。今、新型コロナウイルスの世界的大流行によって、伝わってくるニュースでは、世界が一変しているようですね。でも、私が長野県の安曇野から母と共に敗戦後間もなく東京に移り住むようになったときの印象からすると、その時の敗戦後の上野とか池袋とか新宿の日本のその悲惨な姿ってというのは、今に比べようのないほどで、教会も戦中戦後間もなくは教会堂も焼けていましたしね、牧師先生もチリチリバラバラでしたし、まあ大変だったということ聞いています。だから、私の印象としては、これからこの世界を、このような疫病の中から、私の信じているおかたはどのように脱出の道というか、新しい世界を見せてくださるのだろうか？という思いで、今朝のご降誕祭の礼拝の説教の用意をして参りました。

今開いているヨハネの福音書が教えているこの世界は、どういう世界であるかという、まずこの世界は闇が支配しているということを明確に記していますね。

この『闇』という時にも、聖書は何回も何回も旧約聖書から語っていることですが、それは『死の闇』ですね。死が支配している闇。死が支配するってということは、生命が絶たれるということですから、そういう世界に私たちはあるということですね。

それともう一つの闇は『罪』です。あまり最近、『罪』という言葉が話題にならないんですよ。安倍さんが嘘ついてるのは、あれは罪ですよ。キリスト者の目から見たら、心で感じることは。でも安倍さんは罪を犯してるとは誰も言いませんね。そういう新聞の報道はないですよ。野党の追及でもないですね。私たちの生活の中で『それは悪である』『罪である』って言う人がいないように思うんですが、皆さんの前にはいらっしゃいますか。子どもはお父さんお母さんから「お前は悪いことをした。罪を犯した」って言って叱られた経験がありますか。怒ってくれる人さえもないでしょう。私の母が死んだ時、葬式で私の牧師は「高橋君は大損した。なぜなら、もう真剣に叱ってくれる人がいなくなってしまう」って。これは未だに響いてますよ、私の心に。みなさん子どもを真面目に真剣に叱ってますか。そして自分自身を叱ってま

すか。罪ってね、切り離されることです。罪のあるところ、罪をそのまま許していたら教育の世界も、政治の世界も、経済の世界も、闇がどんどん深まっていくわけですよ。で、最終的には戦争ですね。もうそういう温床を今育てています、私たちの国は。だからコロナウイルスの話題の中で政府が行なってるのは戦争の備えですよ。ミサイルですよ。米国から購入するんですよ。もうその用意ができてんですよ。

Ⅱ. 闇～いのちの光を拒絶する世界

そしてもう一つはね、闇とはね、『いのちの光を拒絶している世界』です。「いのちの光」を拒絶したところに何があるかって言うと、自己愛丸出しのエゴイズムの間人でしょうね。最近、私は礼拝者の中にも「これほど自己中心の人がいるのか」と思って見てしまうことがあります。そのくらい、教会の中でさえも自己愛がはびこり始めているように思えてなりません。「この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった」とこの1章の11節にヨハネは記しました。だから、闇の世っていうのは墮落から墮落へと、暗闇から暗闇へと、雪崩を打つように向かっている。だからそこには悔い改めるといことがないんです。私が、教会っていうかキリスト者の交わりっていうか、聖書の世界に少し半歩ぐらい入った時に、強烈な印象は「悔い改めなさい」ということでした。現在、人々からジャーナリズムとかいろんな書物を出して、有名な歴史家も含めて精神医学の人たちも含めてですけども「賢い」と言われる人々は、公の電波を通して公然として「神はいない」と論じていますね。そして、それに対して反論する人はいません。「唯物的無神論」という、コロナウイルスよりももっと恐ろしい心の病が私たちの国を汚染させているという風に、私はこのご降誕祭の礼拝で強く感じとっています。ですから、そこにあるのは快樂ですね。「さあ食べて飲んで楽しめ。」そしたらそれがGoToなんとかで、いま問題になっちゃったんですね。問題の取り上げ方が全然違います。神様は、聖書はね、「さあ食って飲んで楽しめ」という生活を求めてやまない人に対して、「愚か者」って言うんですよ。「馬鹿者」って言うんですよ。私はこれを高校時代に読んで、強烈な印象を持ちました。「馬鹿ってのはこういう人のこと言うのか。」こんな当たり前のことをこうして教会堂に来て聞いていると、なんか新鮮に感じませんか？当たり前のこと言うんですよ。非常に常識的なことを講壇から話しています。でも、それに対して、この今申し上げたことに対して、警戒している人たちがどんなに少ないことか。悲しいほどです。

Ⅲ. ヨハネにとってのロゴス～ことば～

ヨハネというイエス様の弟子が何でこの福音書を書いたのか。しかも初めにね、「初めにことばがあった」って。ことばってというのはこれは「ロゴス」という超有名なギリシャ語ですね。なんでヨハネはイエス様の福音を「最初に初めにロゴスがあった。」と書いたか？これはね、僕は最初に聖書を学び始めた頃ね、特に牧師として説教者として神学を学ぼうとしたら、「ロゴスは神学的な用語だ」というような本に囲まれていました。今もそういった本をたくさん持ってますけど、でもね、この歳になってこうして皆さんにこのところを解説しようとした時に、ヨハネは神学的な意味でこのことば（ロゴス）という言葉を使っているのではないんじゃないかって思えてならないんですよ。それはどういうことかということ、ヨハネは歳を重ねて行って、そしてイエス様に付き従って、（実は、このヨハネがヨハネの福音書を書いたのはもしかするとエペソ（テモテが伝道を委ねられた大都市）に迫害から逃れてきた時で、そしてその時、イエス様の母マリアも一緒にいたっていうローマカトリックの解釈があります。ローマカトリック教会では常識的な解釈なんです。プロテスタント教会はあんまりそういうことは言いません。そういう伝説が切れてるんですよ。プロテスタント教会はローマ教会と決別した時にね、そういう物語を全部切ってきてるから、ほとんど知らないんですね。知らされてないんです。）でも僕はね、ロゴスって、「初めにことばがあった」って言った時にイエス様に従って、母マリアとの付き合いもあたりして、そういう中で身体で感じたイエスキリストのぬくもり、それは「はじめに神が天と地を創造され」「ことばによって創造された」というこの聖書に表された神様のお姿、それを年老いてからヨハネは、イエス・キリストのことをロゴス=ことばと表現するのが一番自分にとってぴたっと来たんじゃないかなって今感じています。そういう立場で今日の説教は作られています。

だから聖書の言葉を自分の日常生活の中で味わい、そのイエス・キリストの存在がいつも身近に感じ取れない信仰ってのは、聖書のいう信仰じゃないんですよ。

IV. 闇の世界にひかりを届ける

私達日本人の同胞が認識している世界観というのは、仏教と神道という宗教に寄り添う世界観をみんなが共有しています。例えば仏教哲学に、別にそのお寺さんと深い関係がなくても、例えば教会に来て礼拝を守り、そして洗礼を受けてキリスト者であるという立場を公然と告白することはないにしても、無常観とか諸行無常ってような、まあ、端的に言えばね、日本人の物分かりのいい学者さん達は「結局日本人は諦めるという哲学を持っている」っておっしゃるんですね。これはね、すごくね、僕には納得できるんですよ。まあ「諦めが肝心だ」って、これ仏教哲学の中心ですから。ところがね、諦められないんですよ。「諦めました」と言っても。だからどうし

てもあっちの神様、こっちの神様って言って、この年末年始になると仏教徒であると言いながら神社にも行く。「私の家の宗教は神道だ」っていう人はあまりいませんよ。いないけれども、でもお祭りで町内会をずっと仕切ってきたっていうか、哲学的に思想的に宗教的に縛ってきたのは明治以降の日本ですね。天皇を神として天皇を中心とした宗教観。だから伊勢神宮の大元ですね、日本の神社神道の大元は天皇の宗教ですから。今の天皇もそうです。だから最近テレビでそれが映像化するようになってわかってきたでしょ。あれは神道なんですよ。神道とは何かっていうと、太陽でも何でもみんな拝む対象、石でも木でも何でも。そうすると、「無常」って言いながら、（ああ無情の無情ではないですよ。常にあることなしという意味の無常ですよ。そのところを誤解しないでね。）森羅万象が神々である。その象徴的なのは観音様です。観音様っていう存在は、私たちが求めている心の祈りを十分に聞いて満たしてくださる方っていうことで、観音様のイメージを持って、そしてそういう観音像を色々作ってるわけですね。だから初詣の習慣がいつから始まったのかって言うと、やっぱり天皇が日本人の神であるということ、この国体として認めた時に、みんな「初詣に行かなければ日本人じゃない」っていうような雰囲気が出てきたんですね。75年前はそうだった。だから天皇が日本人の神であった時代の印として、初詣が今日も行われると私は理解しています。でも、その神社に初詣する人たちがお寺さんにも行っている。今日の新聞見たらね、あるお寺さんが一面広告出していました。「うちのお寺にいらっしゃいませ」。来年うちの教会でもそういう広告だしましょうか？朝日で。どういう反応出るかね？多分馬鹿にされると思うよ。教会も落ちたもんだって。でも、今日なんて、お寺さんの一面の広告ですよ。神社もありました。これが日本人が認識している、生きるための世界観です。無常という仏教哲学を抱きながらも、森羅万象を神々とする、やおよろずの神をも包括する、わけのわからない心を持っているんです、私たち。私自身も昔そうでしたから。キリスト者になる前、私自身がそうでした。皆さんどうですか。教会の礼拝終わったら八坂神社にお参りに行きますか。キリスト者はそれを出来ないんですよ。ただそういうの教えられてるからじゃなくて。私なんか、全然、そんなこれっぽっちもそんな気持ちないです。

でね、敗戦75年経って、戦勝国である米国との付き合い、政治的・軍事的・経済的な付き合いの米国の影響力が、そのまんま日本に未だに津波のように襲ってきています。例えば日米安保条約がほとんど動かないでいる。私にとってはすごい抵抗があります。何で私達の国に米国が存在しているのか。あの基地の全部は、あれ米国ですからね。米国政府ですから。それが日本列島中にあるのを皆さんは何とも思っておられません？だから新型コロナウイルスの感染の報道と、ほとんど同じぐらいに、米国大統領の選挙のニュースがずっと流れてましたね今年。なんか変だな、と、この辺が

いつも重かったです。そのくらい戦勝国米国と敗戦国日本は、未だに 75 年経っても、その辺の関わりは変わっていないんです。ですから、そういう中で私の今朝こうして話している関心事の中心は何かと言うと、いのちの光を、いかに私たち同胞に、家族に、子供に、孫に届けることができるか。自分だけがキリスト者として礼拝を守らせていただいているっていうことではなくて、どうしたら身近の人たちが私のようにいのちの光を知る人となっていただけなのか。それが、この 2020 年のご降誕祭の礼拝で私自身が問われていることです。

V. オーガスチヌス『告白』

2020 年のご降誕祭の説教者として今思っていることを、ちょっと小難しい話になりますけれども、ローマカトリック教会が生まれる前に、そういう言葉ができる前に、まあ教会史的にカトリックっていう、カトリックっていうのは「正統」という意味なんですよ。

で、それに対してマルチンルーテルが喧嘩して作ったのが、僕たちの仲間なんですよ。歴史的に見て。プロテスタントってそういう意味ですね。で、そのカトリック時代の教父として超有名な方がおられました。それはオーガスチヌスというお方です。この人は 1000 以上の書物を世に残しています。その教父オーガスチヌスは、三つの有名な作品、著書を残しました。一つは『告白』という書物です。もう一つは『神の国』という書物です。そしてもう一つは『三位一体論』という書物です。この三つです。これはプロテスタントの教会に対しても、基本的なすごい影響力を与えている書物です。ご降誕祭が近づくにしたがって、私はこの三つの書物、作品と、私の信仰の歩みを、客観的にずっと考えていたのです。

まず一つは、『告白』っていうのは、話として皆さんは聞いてると思いますが、彼が改心して、悔い改めて、洗礼を受けるようになった経緯が書いてあるんですけども、その経緯っていうのは、彼のお母さんはキリスト教徒だったんですね。皆さんもうご存知だと思いますがモニカっていう名前です。何回も『告白』の中に出てきます。でも父親は異教徒でして、ほとんど語られていないです。でも、相当天才的な頭脳明晰な方だったようで、キリスト者になる前から学校で教えたり、小説を書いたりしていたんですね。人生を 32 歳まで求道し続けた学者でした。ところが、子供がある時、遊びながら、遊び歌って言うか、「取りて読め、取りて読め」って言うね、繰り返しの子供のわらべ歌が聞こえてきて、これも不思議なことでそれに促されるようにしてパウロ書簡を読むんです。学者だからそういうものを読む中にあったんでしょうね。で、特にローマ書を読みました。そのローマ書のある箇所では彼は改心するんです。悔い改めてイエス・キリストを自分の神様、主イエス・キリストと告白するようになる

んです。それは32歳の時です。そして、彼はその時の体験を非常に鮮明に、こういう言い方で私たちに語っています。「あなたは私をご自分の方に向けてくださった。私は32歳にして初めて、神様、あなたに向かう存在となりました。」これが『告白』の中心部分です。私は同じ体験してるんですね。オーガスチヌスじゃないけども、私は16歳の時にクリスチャン達を見て、クリスチャンの同じ高校生を見て、「なんであいつと俺とこんなに違うのか」って自分なりに哲学してたんですよ。それで一人になって、ひとりぼっちになった時に、「神様。あなたは本当におられるのでしょうか。おられるならば私に信じる心をください」とお祈りした時に、瞬間にして私の心はオーガスチヌスと同じように、神の方に向かったんです。それからずっとそのまま今も向いています。オーガスチヌスの体験と私はピタッと合うんですね。

VI. オーガスチヌス『神の国』

それから、もう一つの作品、著書は『神の国』という本です。『神の国』っていう本が書かれたのはですね、ローマ帝国が滅び崩壊しちゃった時です。崩壊して今まであったその国の概念が変わるわけですよ。そういう中で「自分はキリスト者として神の国とはどういう存在なのか」ということを考えて、そして「イエス・キリストを救い主として信じる者たちに与えられている国が神の国である」ということを明確化するんです。これ、パウロも言ってることですけど、イエス・キリストが^{かしら}頭である、私たちキリスト者一人一人教会はその肢体、身体である、ということはイエスを頭として教会はその手足であり身体である。ということは有機的に（ちょっと難しいことですけどね）私たちはひとつとなっている、歴史を超えて、世界を超えて、人種を超えて、国を超えてひとつになって、それは神の国だということをこの本は明確化したんですよ。私はずっと「ユダヤ人の国、イスラエルが再建される」「イスラエルの屈辱がイスラエル人の国の再建によって神の国はなる」というような感じの理解を教えられてきました、神学校で。でもね、今年のご降誕祭の礼拝ではね、私はね、はっきりと自分の偽りのない神の国とはオーガスチヌスがたどり着いたように、ただイエス・キリストを神の子と信じる者たちの集まりを神の国というふうに思います。だから今のイスラエルとかあの米国の大統領は米国の大使館をテルアビブからエルサレムに移したっていう話があるでしょ。ああいう話、ぜんぜん関係ないんです。そう申し上げたいんです。私の親友なんかいまだにイスラエルの復権こそイエス・スキリストが現れる大きなきっかけになるんだってことを、私が教えてる神学校でも教えてるんですけども、僕は彼と全く違います。すなわち一言で言うと「神の国」とは「イエス・キリストを救い主、私の神であると信ずる者」「イエス・キリストが支配して

いる御国」こそが神の国なんです。この神の国に対しての理解が、2020年のご降誕祭を迎えるにあたって整理されてきた私の信仰ですね。

VII. オーガスチヌス『三位一体論』

そしてもうひとつ。オーガスチヌスは、これは今までほとんど2000年間、聖書の信仰だと言われてきた神論、いわゆる「三位一体論」を不動のものとして描いた人なんです。「三位一体論」というのは、聖書が私たちに教えている神様とは、「父なる神様、子なる神様、聖霊なる神様、その三位が一つである」という言葉が三位一体という言葉なんですね。これなかなか、神学的に理解しようとする誰も理解できません。誰も理解できないことを彼は整然と書いた。だからカトリックでは聖オーガスチヌスと呼ばれるんですね。《セント》。別格なんです。

今朝こうして皆様と一緒にご降誕祭の礼拝を捧げている一信徒として申し上げることが出来るのは、私のヨハネ的な、ヨハネがなぜロゴスという言葉を使ったかという考え方に沿って申し上げるならば、私の体験的な三位一体論とは何かって言うと、

「御父の憐れみ、御子の贖い、御霊のとりなしの愛の中に包まれている。それは全世界が歴史的にずっと包まれ続けて、その中に私が今朝もご降誕祭の礼拝を守らせていただいている」という、三位一体論なんです。三位一体である神様は、私に今朝も温もりを与えてくださってるわけ。御父の愛に包まれ、御子の贖いによって罪が赦され、そして、どんな時も私の味方として聖霊なる神様が私をとりなしてくださる。

「わたしはお前の味方だ」と言い続けていてくださる。この神様の愛の温もりを今朝強く感じている、この事を語りたくて語ってるんです。

VIII. 孤独のただ中から輝く光を見る

皆さんは今までの人生で1番寂しかった時はいつでしたか？どんな時でしたか？どこでしたか？どこで味わいましたか？孤独の極み、ひとりぼっちの極みの体験があったでしょ。これね、僕の理論からすると皆一人なんですよ。一人だからひとりぼっちの経験するんですよ。一人だから相手を求めるんですよ。自分が一番寂しい時、一番孤独だった時、もう死ぬことさえも考えてた時、この世をもう捨てたくなった時、その場にいつも思いを戻すということは大切な哲学です。神学です。信仰です。私たちはそこに近寄らないように、忘れようとしてるんです。ごまかしてるんです。でも、本当に寂しさを経験する時に、聖書の神様と私たちは繋がるんです。だから、大切な経験なんです。すなわち、三位一体なる神様を体験する時なんです。だから、簡単に、酒とか食べ物とか旅行とか、なんか安易な娯楽で自分の寂しさを紛らわすことはもったいなさすぎる。ずっと寂しさの中にいる～まあ鬱でもいいですよ。鬱の中にず

っと沈んでいく。沈み込んでいく。落ちるとこまで落ちていく。そこで御父の憐れみ、御子の贖い、御霊のとりなしがじわーっと心に染みってくるんです。それが私たちが信じている神様の存在感、神の憐れみの実態です。そういう体験をする時、私たちは自立した信仰、自分自身がたった一人でも神に向かう心を持つという、自分が望んでいる自分になれるんですね。そういう信仰を持っていますか？キョロキョロして落ち着きのない信仰を、ヨハネは私たちに語っていないんです。

闇の中で輝いているいのちの光を見ている。その喜び・確信・平安。だから「いのちの光」とはイエス・キリストは御父の憐れみに導く私たちの道であり、御父を啓示する、私たちに見せてくださる真理であり、御霊と結び合っただけで一体となる生命です。だからヨハネはまとめてイエス様の言葉を、「わたしは道であり真理でありいのちである」ということを記すことができたんですね。まあこれから、今日の午後の過ごし方、そして24日25日のご降誕祭の過ごし方、さらには新しい年に向かっての過ごし方、ひとりひとり自立して、寂しさの中でもいいですよ、辛さの中でもいいですよ、そこでいのちの光を見る。そういうご降誕のお祝いを一人一人が迎えることができたらと思いますね。

私が今住んでいる所に、山居庵という茶室を持ってるんです。これはね、知ってる人は来るんです。ほとんど突然です。知らない人は来れませんよね。皆さんほとんど知らないと思います。山居庵という茶室は、いつでもおもてなしができる備えができています。今朝もちゃんと花が入っています。来ても来なくても。もしも来たければ、来て「一服飲みたいなあ」って思ったら、タダですからね。400円取りませんから。お寺さんはとっても。しかもお菓子付き。でも、お菓子持ってきたらもっとありがたいですけどね。知らない人はね、知ってる人に聞いてください。いつでも。玄関入らなくて裏口から入るんです。山居庵という茶室があるんですよ。もう来ることを予定にしている方もいらっしゃると思います。ご降誕祭礼拝のニュースとしてお知らせしておきます。皆さんのために開かれている茶室があるなんて贅沢じゃないですか。

あわれみ深き天の父なる神様。いのちの光を拒むのではなく、目を閉じて強情に見ようとしなのではなく、素直に、闇の世においでくださったイエス・キリストの光に導かれて、これからの人生、歩み通すことができるように、一人一人をお守りください。

主イエス・キリストの尊い御名によってお祈りを捧げいたします。アーメン